

大人になる過程の中で、
少年たちは数多くの経験を重ねます。

喜び、悩み、怒り、悲しみ：

少年たちはそこから生まれる

感動を礎にして成長していきます。

11月3日に中央公民館で行われた

「第24回鞍手町少年の主張大会」

そこにはたくさん

感動と勇気と思いがあふれていました。

その中から最優秀賞に選ばれた

3人の作品を紹介します。

今、伝えたい ことがある



審査委員長（教育長）の講評

児童・生徒たちは、一生懸命に発表してくれました。年々、素晴らしい発表となり、甲乙つけがたい審査結果でした。今回のこの経験が将来、大きな力、大きな宝となることでしょう。

少年の主張

小学校 5年生の部

主張した子どもたち(敬称略)

- 久枝 明穂 (剣北小) ・みんなが楽しく住める町
- 長濱 龍成 (古月小) ・環境問題について (地球が病気に)
- 白石 優 (剣南小) ・住みやすい地球にするために
- 大鶴 優人 (室木小) ・広げようあいさつ運動
- 神森 海理 (新延小) ・おばあちゃん がんばれ
- 友廣 怜 (西川小) ・大切な生命



後列左から 大鶴優人 (室木小)・久枝明穂 (剣北小)・友廣 怜 (西川小)
前列左から 白石 優 (剣南小)・神森海理 (新延小)・長濱龍成 (古月小)
(敬称略)

みなさんには、おばあちゃんがいいますか。ぼくには今年70歳になるおばあちゃんがいいます。おばあちゃんは、ぼくが3年生の時、家の中でたおれました。そのときは症状がひどく、病院に行っても会うことさえできませんでした。ぼくは心配で、心配でたまりませんでした。そして、たおれてから3週間後に、やっと会うことができました。その時、ぼくは、とてもうれしかったです。でも、ぼくの顔を見たおばあちゃんは、間違えて弟の名前を呼んでいました。「本当に、おばあちゃんは大丈夫かなあ。」と不安になりました。

おばあちゃんは、脳内出血と言った血管が破れて出血する病気だそうです。この病気は、左側の脳から出血すると、体の右側が動かなくなります。たおれる前は、ぼくたちと相撲を取ったり、ボール遊びや折り紙などをしたりして、よく遊んでくれていました。でもたおれてからは、一緒に遊ぶことはできなくなりました。

おばあちゃんがこの病気になるってつらかったことは、自分の思い通りに言葉が出せないことと、体の右側の自由がきかず、前のように動くことができなくなることだそうです。

もし、ぼくがそうになったら、とてもつらいと思います。大好きな野球もできなくなるし、みんなとも遊べません。悲しくて、何もする気にならないのではな

いかと思います。でも、おばあちゃんには、入院中、病院一の頑張り屋と言われるくらいに、おじいちゃんと一緒に懸命にリハビリをしたそうです。そして、杖をつきながら、一人で歩けるようになり、3か月ぐらいで退院をしました。退院してからも、家でCDを流しながら、足を曲げたり伸ばしたりしています。また、手首を回したり、動かしたりもしています。おばあちゃんがりハビリをしている時は、すごく真剣です。少しずつですが、いろいろなことができるようになっていっているおばあちゃん、すごいなと思います。

これから、おばあちゃんがやりたいことは、畑仕事だそうです。早く好きな畑仕事ができればいいなと思います。体の右側は完全に治ってないので、まだ思うように動くことはできません。だから、おばあちゃんができないで困っていることがあれば、少しでもぼくが力になりたいと思っています。

本当は、おばあちゃんとまた、楽しい相撲を取りたいのですが、大きな病気をした後なので、あまり無理をさせたくありません。これからは、自分のしたいことを楽しみながら、少しずつやっていってほしいと思っています。ぼくも、おばあちゃんのためにできることがあれば、手伝っていきたいと思います。

おばあちゃんは、病気になるって外に出かけることをいやがっ

ていました。でも、この前ぼくの野球を見に行きたいと言ってくれました。それは、野球を頑張っているぼくを応援してくれているからだと思います。野球では、まだぼくはレギュラーではありません。だから、おばあちゃんのリハビリに負けないくらい練習をして、少しでも早く、レギュラーを取りたいと思います。そして、おばあちゃんがいなくても試合を見に来ることができるようになりたいです。

ぼくはこれから、勉強や野球を一生懸命頑張ります。それを見て、おばあちゃんにもっと、もっと元気になってもらいたいです。

「おばあちゃん、ぼくもがんばるから、おばあちゃんもがんばって。」

◎5年生の部 最優秀賞

おばあちゃん がんばれ



かみもり かいり
神森 海理くん
(新延小学校)

*主張を終えて…最初は緊張したけど、表彰式で選ばれたときはうれしかったです。おばあちゃん「これからも一緒に頑張りましょう」。



11月3日に行われた「少年の主張」大会。
それぞれが思い思いに主張した18の作品から
最優秀賞に選ばれた作品を紹介します。

主張した子どもたち(敬称略)

- ・私の友達 久米沙也加 (剣北小)
- ・受けつがれる命 三戸 美公 (古月小)
- ・Love & Peace 山本 詩乃 (剣南小)
- ・地球温暖化について 福本 愛美 (室木小)
- ・平和のバトンタッチ 坂井 昂太 (新延小)
- ・夢に向かって 島田あやの (西川小)



●6年生の部 最優秀賞
受けつがれる命



みとみこ
三戸 美公さん
(古月小学校)

※主張を終えて…新型インフルエンザにかかって、あまり練習できなかったけど、一緒に協力してくれた先生やみんなに感謝しています。おじいちゃんには「金メダル取ったよ」と伝えます。

「おじいちゃん。」
私は、思わず叫んでしまいました。
6月14日、午後8時20分、私のおじいちゃんは、家族や親せきが見守る中、82歳で天国へ旅立ちました。おじいちゃんは、肺気腫という病気でした。私が大きくなった時は、すでに病気が大きくなったため、おじいちゃんとはどこかへ出かけたか遊んだりしたことはありませんでした。しかし、おじいちゃんとの思い出は、私の心の中にたくさん残っています。

おじいちゃんは、家の2階の窓から、私たちの住んでいる古門をながめることが好きでした。そして、私が学校から帰ってくると、部屋のベッドの上から手を振って、お帰りなさいの合図を毎日してくれました。その時のおじいちゃんの笑顔は、今でも忘れることができません。また、うちの庭には、ブランコがあります。このブランコは、今から32年前、おじいちゃんがまだ仕事をしていたころ、仕事から帰って毎日、少しずつ作り上げた、世界でたった一つのブランコです。私は、小さいころ、そのブランコでおばあちゃんとよく遊んでいて、とても楽しかったことを覚えています。

そんなやさしいおじいちゃんの病状が悪くなり、2階の部屋では、おばあちゃんもお世話が大変になりました。そして、とうとうおじいちゃんは、入院することになりました。その時、お父さんは、「じいちゃん、2階から古門の景色を見るのが好きなのにね。」とさみしそうに言いました。入院してからは、おばあちゃんも、毎朝毎晩、病院に通いましても、毎日、毎日おじいちゃんの所へ行きました。私と弟もときどき行きました。お父さんも、どんなに仕事が遅くなっても、おじいちゃんの顔を見て帰ってきました。もう一度家に連れて帰って、2階の窓から古門の景色を見せてあげたかったけれど、残念なことに、みんなの最後の思いは届きませんでした。でも、おじいちゃんがいなくなっても、おじいちゃんがあります。それは、おじいちゃんが、ブランコを作ってくれてなかったら、たくさん楽しい思い出がなかったこと。

おじいちゃんが入院した時に、家族が毎日お見舞いに行っていたのは、みんながおじいちゃんのことを大切に思っていたからだとのこと。そして、私や弟を見るたびに、当たり前のように、「車には気をつけるんだよ」と気遣った言葉をかけてくれたことが、おじいちゃんの私たちに対する愛情だったこと。つまり、おじいちゃんが私たちの命を大切に、私たちがおじいちゃんの命を大切に思う、これが命のつながりだと、私は思ったのです。おじいちゃんがいながら、今、私たちがいる。おじいちゃんから受け継がれた命の重みをしっかりと受け止め、大切にしたいと思えます。そして、私たちが、受け継がれている命を次の世代へと責任を持って伝えていかななくてはなりません。このことを、私にわからせてくれたおじいちゃんに感謝しています。おじいちゃん、ありがとう。



後列左から 坂井昂太 (新延小)・島田あやの (西川小)・福本愛美 (室木小)
前列左から 久米沙也加 (剣北小)・三戸美公 (古月小)・山本詩乃 (剣南小)
(敬称略)

中学生の部

主張した子どもたち(敬称略)

- 早川 玄馬(鞍手北中1年) ・核廃絶と平和
- 佐野 叶恵(鞍手南中1年) ・ともに生きる
- 大庭 悠希(鞍手北中2年) ・平和な世の中を願って
- 内田優太郎(鞍手南中2年) ・One for all, All for one
- 橋本 凌真(鞍手北中3年) ・ぼくが野球で得たこと
- 石井 花織(鞍手南中3年) ・いつも笑顔で



後列左から 大庭悠希(鞍手北)・早川玄馬(鞍手北)・石井花織(鞍手南)
前列左から 内田優太郎(鞍手南)・橋本凌真(鞍手北)・佐野叶恵(鞍手南)
(敬称略)

僕は小学2年生のころから野球をしています。しかし、6年生になってもレギュラーになれませんでした。自分より年下の子がレギュラーで試合に出ていて、年上の僕はいつもベンチにいました。同じ年の子に馬鹿にされるのはもちろん、年下の子にも馬鹿にされました。正直、何度も辞めたいと思いました。しかし、「いつか自分を馬鹿にしてきた人たちを見返してやる」と自分に誓い、毎日練習をしました。

そして2月、もうすぐ僕たちは引退だからと監督は試合で代打で起用してくれました。そして、その打席でホームランを打ちました。両翼70メートル程しかない川原のグラウンドですが、僕にとっては大ホームランでした。なぜなら、今まで全く試合に出られなかったのに、毎日の素振りという努力が実ったからです。両翼70メートルの小さなホームランではありましたが、毎日「自分を馬鹿にしてきた人たちを見返してやる」と素振りをして僕にとってはすごく心に残る出来事でした。

「努力はいつか必ず実る」と本当に思いました。そして僕は中学でも野球部に入りました。中学2年生の夏、新チームになり、僕はレギュラーになれました。さらに副キャプテンも任せられました。最初のシーズンは打率・打点

は共にチームで二番目に良く、盗塁は一番でした。チームに貢献できていたと満足していました。しかし、新シーズンになると全く活躍できなくなりました。むしろチームに迷惑をかけていました。そんなとき、チームメイトは僕を責めませんでした。それどころか、アドバイスをくれたり、僕を笑わせて元気づけてくれたりしました。そんなチームメイトのお陰で何度も救われました。本当に良い仲間を持つたとうれしくてたまらなかつた。そんなチームメイトのためにも一生懸命練習しました。

僕はあまりにチームに迷惑をかけ、先生にしかられたせいか野球を辞めたいと真剣に思いました。しかしそんなとき、コーチや家族、仲間が励ましてくれました。今は調子が悪いだけ。もう少ししたら絶対調子になるよ。そして小学生のときホームランを打ったように「努力は必ず実る」と信じ練習に励みました。そして最後の大会、僕たちは

筑豊大会で引退しました。引退までの4試合、僕はノーヒットで終わりました。試合後は涙が止まりませんでした。コーチが週3日も練習してくれたのに、どんなときも家族が励ましてくれたのに、最後までチームや仲間にもできなくて泣きました。何日か経ち、今までを振り返りました。そして思いました。「努力はいつか必ず実る」と言いますが、今回は実りませんでした。しかし、努力とは実るか実らないかではなく、「どう努力したか、どれだけの気持ちで努力したか」が重要だと考え直しました。僕はノーヒットで中学野球が終わりました。しかし、後悔なんてしていません。なぜなら「あの時にああして練習していれば…」なんて思わないく

●中学生の部 最優秀賞 ぼくが野球で得たこと

らい練習したからです。それは、いつも支えてくれたコーチや仲間、家族のためにと一生懸命練習したからです。僕は、いつまでも悔やんで生きるつもりはありません。高校でも野球を続けようと思っています。もしかしたら、高校でもまたミスばかりするかもしれませんがレギュラーになれないかもしれませんが。人生においても、成功ばかりでなく失敗も多くあることでしょう。しかし、僕は中学野球で得たことを、つまり「努力は実るか実らないかではなく、どう努力したか、どれだけの気持ちで努力したかが重要だ」ということを胸に生きていこうと思います。



はしもと りょうま
橋本 凌真さん
(鞍手北中学校3年)

※主張を終えて…自分の言葉で来てくれた人たちに何か伝えられたらと思い発表しました。最優秀賞はとてうれしかったです。